

1. Summary

1 回り続ける車輪—変化は避けられない

・イントロダクション

この世の全てのものが変化するように、言語も日々変化し続けている。この本の主題は、言語は進歩しているのか、腐敗しているのか、それとも変わらないままではいるのかを解き明かすことである。まずこの章では規範文法と記述文法を区別した上で「文法」という言葉の意味を考える。言語が徐々にその姿を変えていることに疑いようはないが、多くの知識人たちは特定の言語の変化を問題視している。長年にわたり著名な作家やジャーナリストが不満を述べてきたが、これらの意見が正しいかどうかを判断することはできない。彼らの考えに対して起こる疑問に答えるためには、言語の変化はいつどのように起こり誰が始めたか、そしてその発生に他の理由があるのかについて深く知る必要がある。

・純粹さの探求

言語の変化それ自体を考える前に、なぜ今日の人々が変化に否定的なのかを考えるべきだ。歴史的に見て、言語に対する嫌悪や、言語を改善しようという風潮が最も盛り上がったのは18世紀のことである。まず、このときなぜ言語に対する過度な不安が引き起こされたのかを考える。1700年前後、英語の綴り字や使い方は安定していなかった。これに対し、ラテン語を賛美することと、社会的階級の根強い俗物根性という社会的な要因が当時の英語に大きな影響を与えた。特にラテン語は中世から教会で使われていた言語であり、人々に賛美される傾向が強かったため、言語には「正しい」形式があるはずだという認識や、口語よりも文語の方が優れているという認識を生んだ。そんな中、言語の「正しい」形式を決定すべく、サミュエル・ジョンソンやロバート・ロースなどの後世に大きな影響を及ぼす作家たちが登場した。このような言語の「純粹な」形式を求める情熱は21世紀にいたっても続いている。言語の純粹さとはつまり、その言語の正しい形式のことであり、言語の純粹さを求める動きは自然に起こるものである。この情熱が間違っているとは簡単には言えないが、いずれにせよ、社会的な偏見が問題を曖昧にしている。

・規則と文法

重要なのは純粹主義者の「文法」及び「規則」と言語学者の「文法」そして「規則」を区別することである。いわゆる「正しさ」という恣意的な基準を課すために人工的な規則を設ける文法は規範文法とされ、それは執筆者の意見において人々は何を言うべきかを規定する。規範文法は人々が実際に言う事とは比較的関係がないのに対し、言語学者が言う所の文

法と規則は規範的ではなく記述的とされ、彼らの文法と規則は実際に人々が言う事を記述する。言語学者にとって規則というのは、外的な力によって課される恣意的な法則ではなく、ある言語話者に倣う無意識での原理や慣習を成文化することである。また言語学者はある言語が話される時と書かれた時の形は別の関連する体系と見なしており、彼らは前者を主として扱っている。ここで規則という概念をより注意深く考えてみる。言語話者は有限の原理、すなわち「規則」を有しており、それによって実質無限の数の文を理解することができる。綴り字の順番や単語の分節などが規則の例で、要するに人々は発話の目録を学ばない代わりに無意識に従うようないくつかの原理や規則を学んでいるのだ。言語に見られる規則は総じて文法として知られており、言語学者は別の二つの事を意味するものとして相互交換的に用いる。一つは言語話者が無意識に適用している規則で、もう一つはこれらの規則を成文化しようとする言語学者の意識的な試みとされる。言語学者にとって文法という単語は今日一般にある言語全体をカバーするものとして使われていてすなわち音韻論、意味論、そして統語論とその下位分野として重要な形態論を指す。しかし grammar という語はしばしば混乱を招く。語彙の転換と意味変化は社会の変化をも直接反映しており、文法は長い時を経てあるいは個人が生きている間にも変動しているからである。

2 手掛かりの収集—証拠を繋ぎ合わせる

・イントロダクション

言語の変化を研究するために証拠を集めめる方法は何か、どう古い発音が再建されたのか。言語の変化を研究する言語学者はまず根本の要素を集めなければいけない。つまり事実を集め、繋ぐ必要がある。基本的に証拠を集めめる方法としては二つあり「肘掛け椅子の方法」と「テープレコーダーの方法」と呼ばれる。どちらも重要で互いを補完しており、前者は多くの変化を長い期間に渡って概論とすることが可能で、一方後者は細かな変化を詳細に研究することを可能とする。データは質量共に様々で歴史言語学者の課題は出来る限りその不足と欠点を修正することにある。つまり彼らはどのようにその資料にある言語が発音されたかを第一に発見しなければいけなく、次に記録がない期間に起きたことを再建してそのギャップを埋めていく。

・証拠や記録となる資料を口に出す

言語学者は小さな手掛かりの大きな集まりを探し組み合わせて発音を再建する。個々の証拠に価値はなくともそれが重要となるのは他でもない集まった時の効果である。英語の場合、例えば脚韻は言語学者が押さえ調べる必要のある手掛かりの種類の一つだ。そこからさらなる例と証拠を強める他の種類の手掛かりを探す。脚韻が見られないラテン語では語呂合わせが特に役に立つ。他にも動物が発する音の描写も有益だ。またふとして立身出世を狙う者達も手掛かりを与えてくれる。綴りの間違えも良い情報をもたらすだろう。こうした間

接的な手掛かりには時に古くの文法家による記事が補われる。いくつかの論文は現存しており、曖昧なものもあるが有益なものもある。古代ギリシャ語とラテン語の発音の関する詳細な記述もまた存在している。ここに挙げた手掛かりは全体の一部に過ぎない。明らかなのは、言語学者は辛抱強く断片的な手掛かりを探し繋げ、少しづつ完璧な形にしているということだ。彼らは満足に発音を再建したと感じた時に次の段階へ進むことができ、それはギャップを埋めることである。

・ギャップを埋める

我々は二つのギャップを埋める必要がある。一つは我々の言語に関する知識は文字で書かれた記録よりも前まで遡らなければならないということであり、もう一つは資料間にあるギャップは繋がっていないなければならないということである。仮説上言語グループの祖先は祖語として知られている。例えば、インド・ヨーロッパ祖語は今日のドイツ語や英語の祖先であると考えられている。このような言語の祖先を調べるために再建という方法がある。これは多くの関連語から対応する語を比較し、共通の祖先を見つけるといった手法である。比較言語学は、言語は文字とそれが表すものとの間になんら固有の繋がりはなく、恣意的であるということと、音声の変化は偶然的というよりもむしろ一貫しており、規則的であるという二つの仮定に依拠している。これらの仮定によって我々は、借用語を除いた言語において似たような意味を持つ言葉の間に一貫した音の構造を見出せるのであれば、そのような言語は、一つの「親」からの子孫としての「子言語」と呼べるであろうという推論を立てる事ができる。再建は音の体系や語尾の屈折に関しては最も有効だとされている。しかし、再建においては正確さを求める事は難しく、曖昧さや不満要素が発生するのは避けられない。過去に遡る方法としてより確立された方法に内的再建という方法がある。これは、我々は構造上の不規則性は言語の変化によってもたらされたものであるという仮定しており、その下、ある一つの言語のある一つの時代に焦点を当てそれを深く掘り下げ、その言語の以前の様々な姿を推論するというものである。このような方法は英語のような既に十分なデータのある言語のは必要ない。しかし、古い書物による記録のない場合や、証拠に大きなズレがある場合には必要不可欠となる。また比較的最近、類型的再建という方法が発達してきた。これはそれぞれ固有の特徴を持っているいくつかの基本系に言語を分ける事ができるという洞察に基づいている。例えば英語は動詞、目的語の語順の言語に分類される。類型的再建は音にも適用できる。このように再建という方法を用いれば、言語がどのタイプに属するのか、より詳細に推論する事ができ、そのようなタイプと結びつく特徴に関する我々の知識は直接的な証拠のない事実を推論することを可能にする。いくつかの言語は何の変化も経てない純粹な形であったり、タイプに分類する時、我々が正しい基準に基づいているかどうかなどの議論があり、類型的再構は物議をかもしているが、他の方法より有効であると言える。他の再建として、地理的に異なる言語の変化の拡散を追うというものがある。言葉は大抵はバイリンガルの話者によって、とてもゆっくりとある言語から他の言語に借用されていく。例え

ば、東の言語の特徴は初期の言語を彷彿とさせるが、それはゆっくりとより新しい西の言語が広がるにつれて、その特徴にかき消されてしまった。結果として、過去の言語の形を再建することは永遠にもがき続けるようなものであり、近道などない事が分かる。

・歴史的コーパス

しかし、近年、歴史言語学者を前進させるものは言語学的手法を磨くことのみならず、歴史的コーパスの発達も大きく影響している。歴史的コーパスは異なる構造の歴史を図式化することを可能にし、それに関する語彙も図式化できる。

2. Research

・言語変化と人が行うプロセスの関係

人は新たな活動を学ぶとき、練習や反復を通して、その動きをより滑らかにし、予測による別の行動との結び付けをしたり、重要でない動きを減らしたりすることができる。そのプロセスは例に漏れず語や句を何度も繰り返すときにも起こる。すなわち、人は同じ語や構文を何度も繰り返すためにそのプロセスに従うこととなり、それは How are you? や What's up? といったよく繰り返される句を、文字通りの答えを要求しているのではなく単なる挨拶表現へと変化させた。また人は経験からパターンを作成しそれを新たな経験や考えに応用するというプロセスを有していて、そのプロセスは時間を経ることにより言語変化に影響を与える。そして人が行うコミュニケーションというプロセスも言語変化と関連している。言語変化の主要な要因として、語や言語のパターンの文脈の中での使われ方が挙げられるところを踏まえると、コミュニケーションという頻繁に生じる文脈によって与えられる意味は、変化に繋がる可能性があるだろう。

3. Question

- ・言語の正しい文法や正しい使い方を探求しようとする気持ちは本能的なものなのか。
- ・語彙の転換と意味の変化が反映している社会的な変化とは何か。
- ・日本語と英語間における借用の例、またそれに潜む社会的及び文化的背景とは何か。

4. Reference

Joan Bybee 著. 小川芳樹, 柴崎礼士郎監訳. “第 1 章 言語変化の研究”. 言語はどのように変化するのか. 東京, 開拓社, 2019, p. 14-16,